

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成19年度病虫害発生予報第13号(4月)について

このことについて、病虫害発生予報第13号を発表したので送付します。

予報第13号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生時期 (予想)	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	平年比	前年比
麦類	赤かび病	並	-	並	やや多
かんきつ	かいよう病 ミカンハダニ	- -	やや多 並	やや多 並	やや多 並
なし	黒星病	並	-	並	並
かき	フジコナカイガラムシ	-	-	やや多	やや多
茶	カンザワハダニ	-	少	やや少	やや少
冬春イチゴ	うどんこ病 ハダニ類	- -	並 やや多	並 やや多	並 やや少
冬春ナス	すすかび病	-	並	並	やや多
冬春トマト	葉かび病	-	やや多	やや多	やや多
冬春キュウリ	べと病	-	やや少	やや少	並
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ コナシラミ類	- -	やや多 やや少	やや多 並	やや多 並

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

気温は平年並か高いでしょう。降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

週別の気温は、1週目は低く、2週目は高く、3~4週は高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	40	40
降水量	40	30	30
日照時間	30	30	40

(福岡管区气象台 平成20年3月28日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

作物別発生予報

【普通作物】

1 麦類の赤かび病

(1) 予報の内容

発生時期：平年並

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。

イ 農業総合試験場の作況調査によると、今後気温が平年並で経過した場合、出穂期は小麦、大麦ともに平年並と予想される。

参考：作況調査から予想される出穂期（平成20年3月19日付福岡県米麦大豆生育情報参照）

シロガネコムギ（11月21日播種） 4月 9日（平年4月 9日）

チクゴイズミ（11月19日播種） 4月11日（平年4月11日）

ニシノチカラ（11月26日播種） 4月 5日（平年4月 5日）

ほうしゅん（11月26日播種） 4月 8日（平年4月 8日）

アサカゴールド（11月26日播種） 4月10日（平年4月10日）

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は小麦が開花期（出穂後7～10日）、二条大麦が穂揃約10日後（出穂後12～14日後）、裸麦は穂揃期（出穂後2～4日）である。

二条大麦の防除時期については、薬殻の抽出し始めの穂揃い約10日後となっており、この時期は収穫前30日頃となるため、薬剤の選定に当たっては、収穫前日数等に留意する（平成20年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き p26を参照）。

イ 降雨が続き多発が予想される場合は、1週間後にもう一度防除を行う。

ウ 降雨の合間に薬剤防除を行う場合、液剤は散布後一旦乾けば降雨があっても薬剤の効果はある。しかし、粉剤の場合は、散布後6時間以内に降雨があった場合は薬剤の効果落ちるため、天候に留意する。

エ 本病の防除薬剤は予防効果が主体であるため、防除時期を失しないよう注意する。

オ 防除に当たっては、農薬使用基準（収穫前日数等）を遵守するとともに、周辺への農薬飛散防止に努める。

【果樹】

1 かんきつかいよう病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

（県南の一部地域は多）

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果（+）

発病葉率 2.0%（平年0.5%、前年0.9%）

発生ほ場率 33.3%（平年12.9%、前年30.8%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。（±）

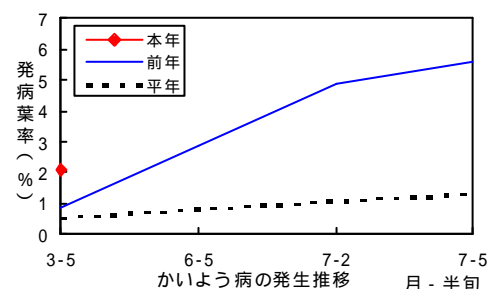
(3) 防除上の注意

ア 発病葉枝は伝染源となるので可能な限り除去し、園外に処分する。

イ 風雨によって伝染するので強風雨が予想される場合は、多発園では必ず事前に防除を行う。

ウ 新葉への感染がみられた場合は、果実への感染も多くなるので、開花前後の防除を徹底する。

エ 多発園では防風対策及びミカンハモグリガの防除を徹底する。



2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

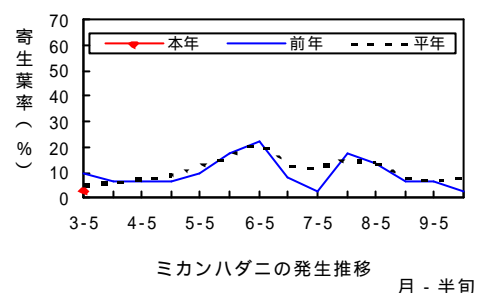
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果(±)

寄生葉率 2.9% (平年 4.9%、前年 10.2%)

発生ほ場率37.5% (平年 37.1%、前年 53.8%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(+))



3 なし黒星病

(1) 予報の内容

発生時期：平年並

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の8月2半旬調査は、発病葉率が1.1% (平年0.7%、前年0.2%)、発生ほ場率が58.3% (平年38.2%、前年53.3%)であり、越冬菌量は平年並と思われる。(±)

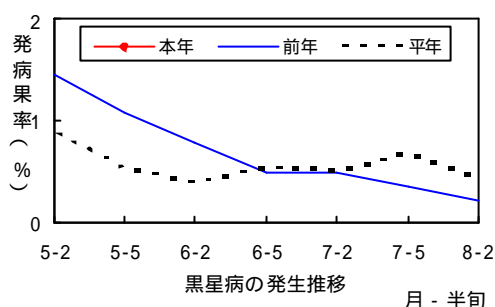
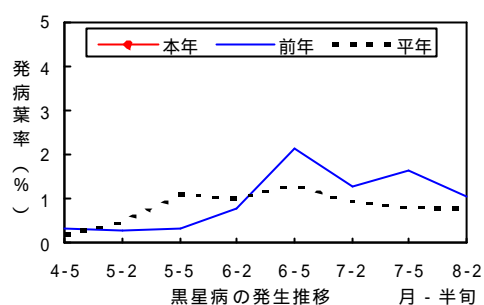
イ 幸水及び豊水の発芽期は平年より1日早い(農業総合試験場調べ)。

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(±)

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除は、本病に対して最も感受性が高い開花直前から開花後2週間までに徹底する。

イ DMI剤に対する感受性低下が見られるため、連用は避け異なる系統の薬剤をローテーション散布する(平成20年度果樹病害虫・雑草防除の手引き p 59~61参照)。



4 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 前年の10月2半旬調査結果(±)

寄生果率 19.8% (平年 17.9%、前年 16.0%)

発生ほ場率100% (平年 82.0%、前年 93.8%)

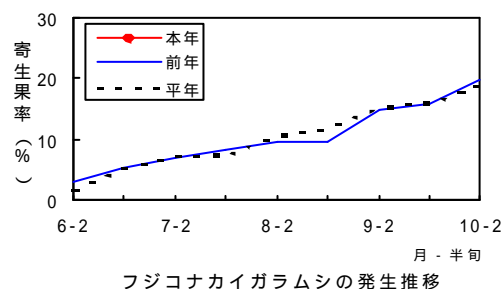
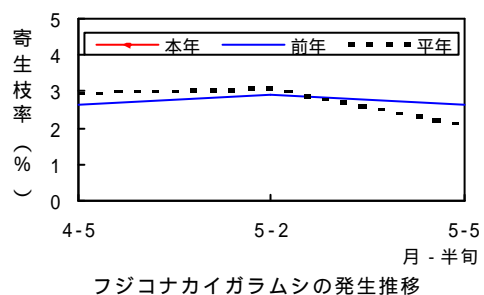
イ 前年の収穫期調査は、寄生果率が24.9% (平年18.7%、前年 16.2%)で越冬量は多いと思われる。(+))

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(+))

(3) 防除上の注意

ア 越冬虫が移動を始める前までに、枝の分岐部等削り残しが無いよう粗皮剥ぎを行う。

イ 越冬幼虫の新梢への移動時期から薬剤防除を徹底する。



【果樹・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ そうか病	並	並	並	発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 罹病葉は伝染源になるので除去する。
ぶどう 黒とう病	-	並	並	頂芽の展葉2～3枚期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 罹病枝や前年取り残した巻きひげは除去する。
かき 炭疽病	-	-	-	伸長始めから硬化前まで感染発病する。 薬剤防除は、天気予報の最高気温と最低気温の和が40以上で降雨が予想される日の直前から開始する。
果樹カメムシ類	-	少	やや少	越冬量は平年より少なかったため、越冬世代成虫の果樹園への飛来量は少ないと予想される。 (越冬量の詳細は、平成20年2月22日付け「速報第6号」を参照)

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

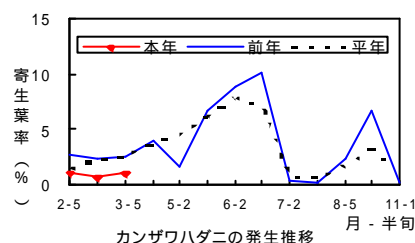
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査結果 (-)

寄生葉率 1.0% (平年 2.6%、前年 2.6%)

50葉当たり虫数1.3頭 (平年 3.4頭、前年 2.2頭)

発生ほ場率 24.0% (前年 40.0%)



イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(+)

(3) 防除上の注意

ア ほ場をよく観察し、寄生葉率2%以上の茶園では防除を行う。

イ 霜害後は多発しやすいので、なるべく早めに防除する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査結果(±)

発病株率 0.8%(平年 0.8%、前年 1.0%)

発生ほ場率 15.4%(平年 16.0%、前年 7.7%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(±)

(3) 防除上の注意

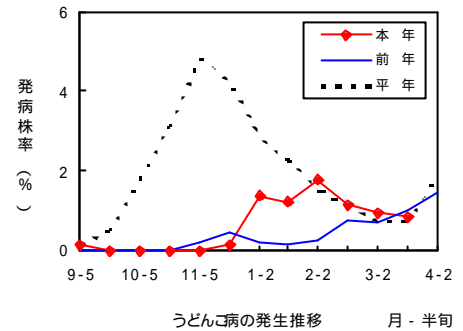
ア 本病の初発生は、新しく展開した葉の裏に認められるので、上位葉裏面の病斑の有無を随時確認し早期発見に努める。

イ 発病葉、果実は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ 施設内が多湿になると、発病に好適となるため、予防散布を徹底する。

エ 不要な下葉を除去し、薬液が葉裏にもかかるようにする。

オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をロテーション散布する。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査結果(+)

寄生株率 15.2%(平年 8.4%、前年 24.8%)

発生ほ場率 69.2%(平年 43.9%、前年 65.4%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(+))

(3) 防除上の注意

ア ハダニ類は、はじめスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多い。多発生後は防除が困難となるので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生がみられたら早めに防除を行う。

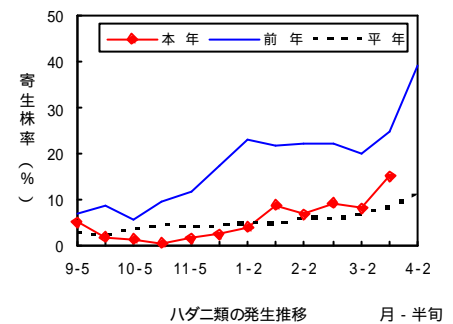
イ 防除は摘葉後に行うと効果的である。その際、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。

ウ イチゴ以外の植物にも寄生するので、ほ場内や周辺の除草を徹底する。

エ ハダニ類が寄生した摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。

オ チリカブリダニ等の天敵を利用しているほ場で、ハダニ類が増加した場合は、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤で補完防除する。

カ 薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選定は注意する。



3 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

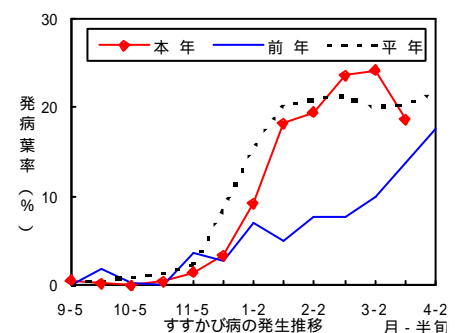
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査結果(±)

発病株率 18.6%(平年 20.3%、前年 13.7%)

発生ほ場率 88.9%(平年 89.3%、前年 88.9%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(±)



(3) 防除上の注意

- ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。
- イ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

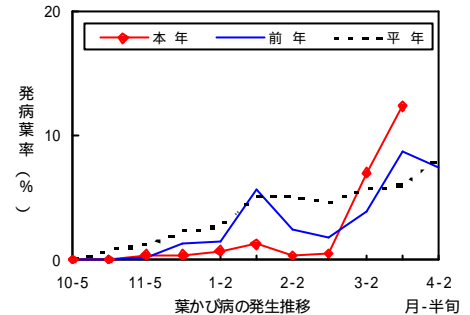
4 トマト葉かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 3月5半旬調査結果(+)
 - 発病株率 12.4%(平年 6.0%、前年 8.7%)
 - 発生ほ場率 27.3%(平年 38.2%、前年 58.3%)
- イ ほ場間差が大きく、一部ほ場で多発している。
- ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並が高く、降水量は少ない。(±)



(3) 防除上の注意

- ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。
- イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。
- ウ 草勢が低下すると発病が助長されるので、適正な肥培管理を行う。
- エ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

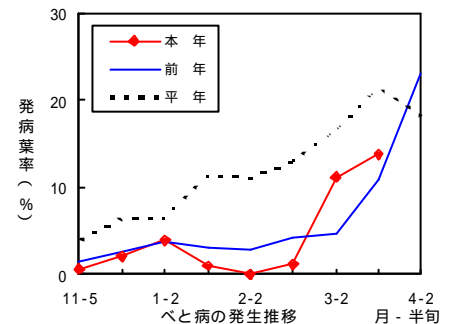
5 キュウリべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 3月5半旬調査結果(-)
 - 発病株率 13.9%(平年 21.5%、前年 11.0%)
 - 発生ほ場率 60.0%(平年 66.6%、前年 83.3%)
- イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並が高く、降水量は少ない。(+))



(3) 防除上の注意

- ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。
- イ 草勢が低下すると発病が助長されるので、適正な肥培管理を行う。
- ウ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。
- エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

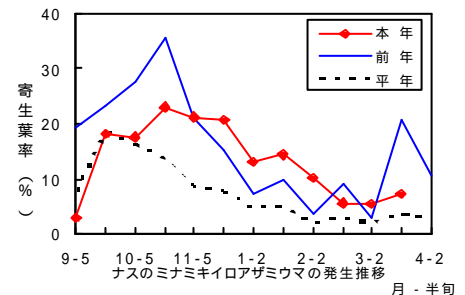
6 ミナミキイロアザミウマ(野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 3月5半旬調査結果(+)
 - ナス寄生葉率 7.1%(平年 4.0%、前年 20.8%)
 - 発生ほ場率 77.8%(平年 28.9%、前年 66.7%)
 - ナス被害果率 0.2%(平年 0.5%、前年 0.6%)
 - 発生ほ場率 11.1%(平年 23.6%、前年 25.0%)



キュウリ寄生葉率 12.0% (平年 5.8%、前年 0%)

発生ほ場率 60.0% (平年 46.9%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(+)

(3) 防除上の注意

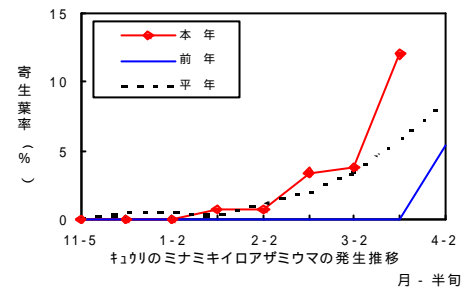
ア 発生後は防除が困難である。早期発見に努め、早期防除を徹底する。

イ 初発生は、葉脈沿いに現れる食害症状を確認して判断する。葉表では長さ2～3mmの細い白斑が葉脈に沿って連続して生じる。また、葉裏では3～5mmの大きさの銀白色に光る部分が葉脈沿いのところどころに生じる。

ウ 葉表より葉裏への寄生が多いので、薬剤散布は散布むらがないように丁寧に散布する。また、薬剤の到達しない葉内の卵から幼虫が、土中の蛹から成虫が徐々に発生してくるので、それらの虫を対象に5～10日後にもう一度薬剤散布を行う。

エ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

オ 本種はキュウリの黄化えそ病(MYSV)の媒介虫である。このウイルスは本虫が低密度でも伝染し、蔓延する恐れがあるので防除を徹底する。



7 コナジラミ類 (野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査結果 (±)

ナス寄生葉率 3.0% (前年 5.1%)

発生ほ場率 33.3% (前年66.7%)

トマト寄生葉率 0.5% (平年 5.8%、前年 0.5%)

発生ほ場率 18.2% (平年35.1%、前年25.0%)

キュウリ寄生葉率0.8% (前年 0.7%)

発生ほ場率 20.0% (前年33.3%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない。(+)

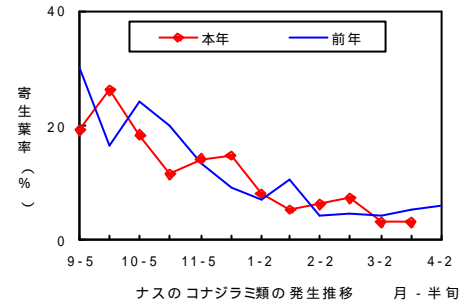
(3) 防除上の注意

ア 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げる。

イ 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように散布する。

ウ 施設内でみられるコナジラミ類は、主にタバココナジラミバイオタイプQである。タバココナジラミはトマト黄化葉巻病(TYLCV)、キュウリ退緑黄化病(仮称)の媒介虫であるので、防除を徹底する。

エ ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息、増殖源を絶つ。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ 灰色かび病	並	並	並	施設果菜類の灰色かび病は、多湿の場合に発病しやすい。日最低気温が高いと温度設定によっては暖房機が稼働しないこともあるので、強制送風をするなどして湿度の低下を図る。
ナス うどんこ病 灰色かび病	並 並	並 並	並 並	
トマト 灰色かび病	並	並	並	
キュウリ うどんこ病 灰色かび病	並 少	並 並	並 並	

農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が農作物毎に設定され基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルを確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講ずるとともに注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数のなどラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jppn.ne.jp